

# ベースボールにみるグローバル化

## — MLBによるドミニカプロ野球包摂を中心に —

石 原 豊 一

### 目 次

#### はじめに

#### 1：スポーツとそのグローバル化

##### 1-1 スポーツと近代

##### 1-2 スポーツのグローバル化研究と野球の拡大

#### 2：野球の誕生と拡大

##### 2-1 野球の発生と伝播，国際的普及

##### 2-2 米国文化の表象としての野球拡大

##### 2-3 多国籍企業MLBによるプロ野球の「系列化」

#### 3：ドミニカ野球に見る野球拡大の様相

##### 3-1 ドミニカ野球の歴史

##### 3-2 MLBによるドミニカ野球包摂

##### 3-3 野球の拡大によるローカル意識の覚醒

#### 4：MLB拡大の要因：「周辺」を求める「中心」

##### 4-1 MLBによる北米プロ野球の組織化とラテンアメリカ野球の包摂

##### 4-2 MLB拡大の必然性～「技能密度」～

##### 4-3 マイナーリーグの縮小と再拡大～米国への選手供給地としてのラテンアメリカ

#### 5：ベースボールのグローバル化の行方

#### おわりに

## はじめに

2008年はオリンピックイヤーである。このスポーツの祭典への出場をかけて様々な「日本代表」チームが予選大会を戦っている様子がテレビ画面に映し出されている。そして、我々がこれらのスポーツシーンを目にする時、競技者の姿と共に無数の企業の広告がいやおうなしに入ってくる。今やスポーツの国際大会には大企業のスポンサーがつき、スタジアムに大観衆を集めメディアを通じて世界中にその様子が伝えられる人気スポーツは世界の人々をつなぐ文化ツールであるとともに、莫大な金が動く巨大ビジネスになりつつある。

現在我々が「スポーツ」と認識している身体活動のほとんどは欧米生まれのものである。マグガイヤー（1999,14）は、グローバル化を「人間同士を良い意味でも悪い意味でも結び付ける政治的、経済的、社会的な相互依存性のネットワークの拡大」と表現したが、スポーツを通じた地球規模のネットワークの拡大は近代社会の形成と連動したものであり、その文化事象の拡大に巨大資本が関わるという現象は近年顕著になってきている。このような現象がいつから始まり、又それをどう捉えられるべきかを、米国発のスポーツである野球を検証することにより探るのが本研究の主眼である。

## 1：スポーツとそのグローバル化

### 1-1：スポーツと近代

人は古来体を使った「遊び」を行ってきた。古代エジプトにおいて弓矢で的を射る遊びが王族の間で愛好されていることが知られているし（デッカー：1995）、中南米に残るメソアメリカ文明の遺跡には「球戯場」が残されている。

しかし、これらは現在我々がイメージする「スポーツ」とは性格を異にする。現在我々が通常使う意味での「プレイの性格をもち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動<sup>1)</sup>」としてのスポーツが生まれたのは18世紀のイギリスであり、その後これが工業化と都市化の進展を背景にして世界中に広がっていった。

グットマン（1997,2-13）はこれを「近代スポーツ」として伝統社会の身体競技と区別し、産業化に伴う「伝統スポーツ」の形式化をその特徴として挙げた。

近代以降の地球規模でのヒト・モノの流れの加速化をグローバル化と言うならば、スポーツの拡大はまさにその一現象と言える。19世紀中に広がったサッカー、クリケットがイギリス生まれのスポーツであることは、産業化の中心が大英帝国であったことを如実に示しているし、その中心が米国に移った第二次大戦後、この国生まれのスポーツである野球が世界に拡大していくことは必然とも取れる。

## 1-2：スポーツのグローバル化研究と野球の拡大<sup>2)</sup>

マグガイヤーは、両大戦後に米国生まれのスポーツが地球規模に拡大してゆく流れについて論じる中で、そのグローバルな相互依存関係を、国境を越えて流入するスポーツ文化の主流であるとし、米国的大衆消費文化を代表するプロスポーツの導入＝「アメリカ化」と捉えた。彼はスポーツの地球規模的ネットワークの拡大の始まりを英国に求めながらも、1920年代からの欧米諸国の覇権をめぐる闘争の結果、北米スポーツがその中心となりつつあることを指摘している（マグガイヤー前掲論文）。

資本とスポーツとの関係については、キッドやマックイ&ミラーが論じている。前者はカナダプロスポーツの「アメリカ化」が同国の自立の侵害、国民的アイデンティティの衰退にまで及ぶとし（Kidd：1981）、後者は、豪州におけるスポーツの商品化を米国発の戦略としての多国籍企業によるスポーツへの投資であるとした上で、これを単に「アメリカ化」だけで説明することはできないと論じた（Mckay&Miller：1991）。

それに対し、ワグナーは、スポーツの地球的拡大を「アメリカ化」もその一部に含めた「Mundialization」＝「地球化」と定義づけ、スポーツ文化の普及を欧米から周辺国への一方向だけで解釈することはできないとした上で、長期的にはスポーツ文化は単一化の方向に向かうが、それは人々の意思の反映であり、「帝国主義」などという言葉で表現しうるものではないとした（Wagner：1990）。彼に従えば、野球の普及は「地球化」の一部として進むであろうが、それは例えば、柔道がオリンピックスポーツになると本質的には違いがなく、柔道が世界規模に普及して行く際に、変質を余儀なくされたのと同じく、野球もまた普及先で何らかの変質を伴うものと考えられる。

グットマンは近代スポーツの拡大が「文化帝国主義」であるという論調に関して、政治経済的強者の文化は広がりやすいが、歴史的には政治的経済的ベクトルと文化的なそれとの不一致が見られることもあることを指摘<sup>3)</sup>、双方向の文化の伝播を「文化ヘゲモニー」の概念で表すべきだとした（Guttman：1991）。そして、「周辺」の国々でクリケット、サッカーが好まれている事実は、工業化された「中心」の先進国において、伝統スポーツが消滅していったことと本質的な違いはない（グットマン：1997,11）とした上で、ワグナーの言う「地球化」もスポーツの世界規模の普及を示す言葉としては適切とは言えず、伝統から近代、世俗化・合理化などのグローバルな変容の本質を考えるに当たってスポーツの普及を「近代化」の概念で読み解いた。

カリブ野球の研究で知られるクラインもこのヘゲモニー概念を野球伝播に応用したが、グットマンとは異なり、野球のドミニカ共和国（以下ドミニカ）への普及をドミニカ文化の「周辺化＝文化帝国主義であるとも位置づけ（Klein：1989,1991a）、球場のファンのファッションや選手の言動に強者に対する不同意や抵抗の意思を見て取り、野球を米国人と対等に競い、時と

して優位に立つことのできる「抗争の場」であるとした (Klein : 1991a,b)。

一般に欧米発のものが周辺諸国へ伝播するというのが大きな潮流であるかのように見えるスポーツの世界的普及の様相について、論者の多くは単純な「中心-周辺」という図式ではその枠組は語れないとしている<sup>4)</sup>。野球についても、現在のこのスポーツがプロスポーツとして普及しているのは、米国の影響力が歴史的に強い地域に限られており、このスポーツの普及に「近代世界システム」(ウォーラスティン : 1981) の枠組みを当てはめることができるのかは検討の余地がある。

しかし、世界的なプロ野球の現実を見ると、「世界システム」を想起させるような構造が構築されつつあり、スポーツは世界経済の中においてあらかじめ阻害されている新興独立国の経済成長の裏返しであるかのように見えることもまた確かである。今まさに北米のトップリーグ、MLBを頂点する「システム」は拡大し、世界規模での「選手の掠奪、興業の侵略」(金光 : 1999) は進んでいる。

## 2 : 野球の誕生と拡大

### 2-1 : 野球の発生と伝播、国際的普及

野球は、19世紀に英国のボールゲームをもとに米国北東部で起こった。都市労働者の娯楽として生まれたこのゲームは、米国の産業化と足並みをそろえるかのように浸透してゆき、19世紀半ばにはアメリカの「国民的娯楽」と呼ばれるまでになっていた (ハリス : 1998,19)。

1869年、プロ化した強豪シンシナティ・レッドストッキングスが興行的に成功を収めたことにより、このスポーツは「見る娯楽」という形で全米に広がる。ナショナルリーグとアメリカンリーグが1903年に合併してできた「メジャーリーグベースボール (以下MLB)」は<sup>5)</sup>、東部から中西部の大都市にかけて展開、その他の地域ではマイナーリーグが根付いていった。

第2次大戦後には人種差別的観点から締め出されていた黒人選手のMLB入団も始まり、1950年代以降テレビの普及、航空網の発達により、各地のマイナーリーグはMLBを頂点とするピラミッド型の組織に組み入れられていった<sup>6)</sup>。

一方で、野球は米国の発展とともに世界へと伝播した。そしてそれが現地の人々の間で根付いた地域でもプロ野球がはじまった。現在北米以外で野球がプロ興業として行われているのは、日本・韓国・台湾・中国・メキシコ・ベネズエラ・ドミニカ・コロンビア・ニカラグア・イスラエルである。つまり野球の盛んな地域は東アジア・中南米カリブ地域が中心であり、いわばこのスポーツはアメリカの影響力拡大とともに世界へ発展していったと言える。

次項以降では、その野球の拡大を、多国籍企業化したMLBという資本の影響力の有無に着目して、2つの時期に大別して論じてゆく。その第1の時期は19世紀終わりであり、第2の時

期は1950年代を始期とした今なお続いている拡大である。

## 2-2：米国文化の表象としての野球拡大

前項で述べたように、野球はヨーロッパからの移民が持ち込んだゲームを核として発生したが、「アメリカ人に求められるアイデンティティの次元がビジネスの対象になるという事実(内田2007,6)」を発見したアルバート・スポルディングは、このゲームを純粹に米国起源とするため、南北戦争の英雄であるアプナー・ダブルディ将軍が発明したという「クーパーズタウン神話」を「創作」し、その上で国民的スポーツとしての野球の普及に努めた。彼はその名を野球用品メーカーに残していることからわかるように、野球を産業として確立した貢献者の一人である。しかし、彼がおこなった「世界ツアー」(1888年)の訪問先で野球が根付くことはなかった事実が示すように、19世紀においては、野球は見世物興行という資本と結びついた形では、世界規模での拡大を行えなかった。

このツアーが巡った国々は欧州とその植民地統治下に置かれていた国々である<sup>7)</sup>。これらの地域で優勢であったのは、大英帝国を中心とするヨーロッパの文化であり、従ってこれらの国々の人々にとってこの米国生まれのスポーツは「品位を落としたラウンダースの一形態」に過ぎなかった(グットマン前掲書,111)。その結果、野球の伝播先はヨーロッパ文化の影響が米国のそれを上回ることはない地域に限られた。

東アジア地域に目を転ずると、日本には1873年、米国人教師ウィルソンにより伝えられた。その後、学生野球を中心に野球は「見世物」として根付いていき、1921年にはプロ興行が始まった<sup>8)</sup>。

中国には19世紀末に宣教師か外遊帰りの留学生により伝来した<sup>9)</sup>。韓国にも1905年宣教師により伝えられ(大島：2006,10)、同じ日本の植民地統治下に置かれた台湾と共に、草の根レベルで普及してゆく。

米国は19世紀中葉に吹き荒れたラテンアメリカ独立闘争の激化に際して、「モンロー主義」を外交方針とした。これは中南米を自国の経済的後背地とすることを目論むものであり、この地域には20世紀初頭にかけて米国資本が流入、その結果、米国からの労働者や留学生によって野球が伝播した。

1864年、米国留学帰りの学生により野球が伝えられたキューバでは伝来と同時に人気を博し、1878年にはプロチームも創設された(パイ&ペタビーノ：1999,32-33)。

メキシコには米墨戦争後の1882年に鉄道会社の米国人従業員によって伝えられた。同国南部にはキューバ人により持ち込まれ、地元チームと大リーグチームとの試合がおこなわれるなど娯楽としての価値が高まり、1925年にはプロリーグが発足した(グットマン前掲書,101-103)。

その他、パナマには運河建設時に(Klein：1995,114)、ベネズエラには石油産業の米国人労

働者，帰国留学生により野球が伝えられた。ニカラグアには1888年に伝来（Ruck：1999,537），1904年には米国領事により首都マナグアに最初のプロチームができた<sup>10)</sup>。

一方，これらの地域と豪州との相違は際立っている。1882年にゴールドラッシュの波に乗ってやってきた米国人によって伝えられた（グットマン前掲書,110）野球は，米国のそれを凌駕する宗主国英国の文化的優勢のため，「スポルディング・ツアー」後も人々の心を捉えることはなかった。このツアーは「商業主義と同時に，ベースボールというアメリカの国民的ゲームを世界に知らせ広めるといふ文化的目標をもっていた（内田前掲書,23）」が，大英帝国の「臣民」達は帝国の中心である英国の文化に誇りを持ち，海の向こうの新興国のスポーツに憧れを抱くことはなかったのである。

このスポルディングの商業主義的な野望が米国外において失敗する一方で，「ツアー」が訪問しなかった東アジア，中南米に野球が普及していったことは，この時期の野球の世界的普及の要因が商業的なものよりむしろ，政治や文化的な米国との関係に帰するものであったことを示している。

### 2-3：多国籍企業MLBによるプロ野球の「系列化」

野球の世界的な拡大は，1950年代以降その性格を大きく変化させる。それはプロ化＝スポーツの商業化と密接にかかわっており，北米のプロリーグMLBによる地球規模的包摂の過程である。

有色人種を排除していたMLBは国内においてはいわゆる「ニグロリーグ<sup>11)</sup>」やマイナーリーグとの関係は薄く，国外のプロ野球とも分離していた（Klein：1995,115）。これが1947年の黒人選手ジャッキー・ロビンソンのブルックリン・ドジャーズ入団後大きく変わる。

ニューヨークに本拠を置いていたドジャーズとジャイアンツの東海岸移転（1958）に象徴されるように，東海岸から中西部にかけて展開されていたMLBは1950年代の末から，航空機やテレビ放送などのインフラの整備と人種差別の撤廃を背景に，全米への拡大を始める。つまり，この時代は，米国東部の「見世物」でしかなかったMLBが全米規模に拡大し，各地のマイナーリーグを包摂しはじめた時代でもあった<sup>12)</sup>。この時期に米国内において，MLB－マイナーリーグというヒエラルキーが確立し，アメリカプロ野球が「オーガナイズド・ベースボール」という企業連合が確立したことに，現在につながるMLBの拡張主義の始まりを見出せる。

一方，1950年代中葉までの中南米のプロ野球はMLBから独立しており，MLB選手の給与が決して高額であったわけではないこの時代，多くの大リーガーが収入を補完するためキューバなどの冬季リーグに参加，MLBから締め出されていた黒人選手も白人選手とプレーするチャンスと収入を求めて海を越えた。

しかし，第二次大戦期の選手不足と，1940年代に起こったメキシカンリーグによる選手引き

抜きは<sup>13)</sup>、MLB選手の賃金上昇を招き、又、MLBによる北米プロ野球の「系列化」とテレビをはじめとするメディアの発達はMLBと他の国内外のリーグとの間に決定的な経済的格差を生んだ。この文脈の中、1950年代後半からラテンアメリカ地域は野球においても「後背地」となってゆく。

1940年代「第三のメジャーリーグ」たろうとしたメキシカンリーグは、1955年に米国マイナーリーグの統括組織である「ナショナルアソシエーション (NA)」に加入、MLBと時期の重なっていたドミニカ、ニカラグアのリーグは1955年と1957年にそれぞれ冬季リーグ化した。又、同じく1950年代までにキューバにMLB傘下のマイナーリーグチームが本拠を置くなど (ゲットマン前掲書,99)、キューバ野球も米国野球に包摂されていった。

さらに1970年代後半からの選手の年俵急騰に悩むMLB球団は、より安い労働力=選手を求め、中南米カリブ地域だけでなく、かつてスボルディングの野望が打ち砕かれた欧州や豪州、アフリカへの野球普及に力を入れるようになり、プロ野球の浸透した東アジア地域へもマーケティングの拡大を行うようになる。

この成果は南アフリカの五輪、ワールド・ベースボール・クラシック (以下WBC) 出場や、野球不毛の地イスラエルに発足したプロリーグとなって現れている。スボルディングの商業的拡大の失敗以来「内向きの」ゲームであった (内田前掲書,27) 野球は1950年代を境に「外向きの」拡大を行うようになった。そしてその拡大は「中心国」の文化事象が「周辺」に普及していくというのとどまらず、多国籍企業の周辺国経済支配にもなぞらえることのできる地球規模で形成されるMLB中心のヒエラルキー形成とすることができる。

### 3：ドミニカ野球に見る野球拡大の様相

#### 3-1：ドミニカ野球史

ドミニカに野球が伝わったのは1880年、キューバ人によってのことである (Klein：2006,93)。その後急速に普及、1907年には最初のプロ球団が誕生し、米軍による占領中の1921年にはプロトーナメントも開催される。クラインはこの普及の早さの要因に、キューバとの文化的相似に加えドミニカ人にとってこの米国生まれのスポーツが「力の象徴」と映ったことを挙げている (Klein：1991b,16-17、以下ドミニカ野球の歴史については同書参照)。

1920年代にはドミニカプロ野球の組織化が進んだが、米国での不況のあおりで1929年に中断。その後1936年に復活、翌年には独裁者トルヒーヨが自身の人気集めのために首都サントドミンゴの2チームを統合、「トルヒーヨ・ドラゴンズ」を組織し、米国などから選手の引抜きを行うも、財政破綻を起こし再び休止に追い込まれた。

ドミニカプロ野球が再び活況を呈するのは1950年代になってからのことである。特に1951年

から54年は「ベースボール・ロマンティコ」と呼ばれる黄金時代を迎え、政府の援助、テレビ放送の開始などの追い風も受け発展を遂げた。この時期、MLBは外国のリーグに興味を示さず、夏に行われたドミニカリーグには、周辺諸国からの選手も参加、逆にそれらの国々で行われた冬季リーグにはドミニカ人選手が参加するなど、この時期、ドミニカはキューバと並んで中米カリブ地域の野球の中心的存在となる。

### 3-2：MLBによるドミニカ野球包摂

この構図が大きく変わったのが、1954年のMLBとの業務提携である。これにより翌年には国内リーグを冬季リーグ化したドミニカは、最初の大リーガー、オジー・バージルを送り出し、以後、米国球界への人材供給国に変わっていった。さらにキューバ革命（1958）による同国と米国との人的交流の断絶はMLBによるドミニカ野球の包摂を加速化させた。

この両者の「中心-周辺」関係は80年代に入ってさらに固定化される。

70年代後半以前は、北米のプロ野球と中南米カリブ地域のプロ野球選手の報酬に決定的な差はなかった。MLBを含む北米の選手にとって、この地域での冬のプロ野球は、母国でのオフシーズンの収入の途であり、好待遇を勝ち取るための技術向上の場でもあった（Ruck：前掲論文,537）。

この状況が大きく変わるきっかけとなったのが、1976年にMLBで導入されたフリーエージェント（FA）制である。この制度導入以前は米国でプレーする選手は球団から解雇されない限りは、所属球団としか翌年以降の契約が結べなかったが、導入後は一定年限大リーグに在籍すれば、以後の契約相手を選手は自由に選ぶことができるようになった。このことが米国での選手報酬の高騰を招き、各球団は安価な労働力を求めてドミニカをはじめとする中米カリブ地域に選手獲得の場を求めるようになる。

FA制導入を境にした20年間でMLB選手の最低年俵は約9.5倍、平均年俵は約20倍に高騰する。これに対し、選手は球団側からの解雇以外は契約を解消できないドミニカでは、ドミニカ人選手の報酬は同国の通貨ペソの下落もあって、ほぼ同じ期間でほとんど据え置きであり、ドミニカでプレーする米国人選手の最低年俵も4倍にしか増えていない（Klein：1991b,37）。この結果、かつては冬の稼ぎ場所としてドミニカを選んだ大リーガーはもちろん、MLBで成功を取めたドミニカ人トップ選手の参加が激減、その結果、ドミニカプロ野球は観客の減少に悩み、MLBへの従属をますます深めることになった。

従属を強めたドミニカリーグは、業務提携によるMLBからの選手獲得にますます依存するようになり、米国球団は経験の浅い若手選手の育成の場としてドミニカを利用するようになった。さらに1980年代になると野球学校＝アカデミーの設立ブームがおきた。以後、ドミニカは完全にMLBの選手育成の場と化し、米国の多国籍企業と周辺国の子会社の間での取引になぞ



らえることもできる関係 (同,42) が、両者の間に構築された。

MLBによる「青田買い」ともいえるアカデミーの設立は、教育が就業につながらないという風潮を助長し、他産業での人材の育成の足かせになる (Klein: 1989)<sup>14)</sup>。また、年少の少年への強引なスカウトは社会問題にも発展、野球での成功を目指す少年が筋肉増強のためのステロイド剤の多用によって死亡する事件 (Kelly: 2006,831) なども起こった<sup>15)</sup>。そして、アカデミーでの競争に勝ち抜き米国での契約を勝ち取った選手も、文化的相違からノイローゼになったり、粗暴な振る舞いに及ぶ「ヘッド・ケース」と言われる不適応症状を見せたり (Klein: 1991b,87-90)、北米での解雇後、母国に帰らずに麻薬売買など違法行為に生活の糧を求めるケースも出ている (同,83-84)。

さらにMLBによるドミニカ野球の侵食はこれらだけにとどまらず、アカデミー設立により有望選手の卵を奪われたアマチュア球界も衰退の危機にさらされている (同,48)。

一方、社会レベルにおいてはともかく、個人レベルにおいては、北米での野球を通じた就業の機会がドミニカ人にとって富へのツールであることは確かである。しかし、米国の保護主義的な考えは「オーガナイズド・ベースボール」に対する就労ビザの制限となって現われた (Ruck: 前掲論文,540)。

つまり「周辺」のドミニカの選手は結局のところ、「中心」である米国人の補完以上の存在にはなりえず、また近年のMLBのマーケティング拡大戦略により、報酬が高額であってもグッズ売り上げなどの「副収入」の期待できる日本人選手などの動向如何では切り捨てられる存在でもある。

また、日本球団のアカデミー設立に象徴されるような<sup>16)</sup> アジア球界のドミニカ人選手獲得においても結局のところ、選手不足を補う安価な労働力獲得の場としてのドミニカという役割は変わるところはない。又、アジア球界からのトップ選手のMLB流出という事実を考え合わせると、北米に拠点を置く企業のネットワークである「オーガナイズド・ベースボール」による従属支配関係の拡大を見ることができる。

野球のドミニカへの拡大は、結局、多国籍企業MLBによるドミニカ野球の「系列化」を生み、その結果、ドミニカ野球は自立性を失い、MLB選手の育成の役割を担わされることになった。

### 3-3: 野球の拡大によるローカル意識の覚醒

野球の拡大は現地に何をもたらしたのであろうか。野球そのものが米国生まれのスポーツであることは確かだが、文化的側面から見るとその受容は単に「アメリカ化」の言葉で表現できるものではない。

プロ野球の伝統が米国に次いで古く、1950年代にはマイナーリーグの強豪として名をはせた

「ハバナ・シュガーキングス」を輩出、1949年に始まったカリブ地区各国のプロ野球リーグのチャンピオンシップ、「カリビアンシリーズ」においても1960年大会までに7回の優勝を飾るなど、ドミニカと並ぶ中南米の野球の中心であったキューバは、1959年の社会主義革命以後、北米野球と袂を分かたつ。

しかし、反米の姿勢を鮮明にした革命政権の下、米国のスポーツである野球は、この社会主義国でも「ナショナルゲーム」の地位を築いてゆく。この国にあって野球は、先住民の伝統スポーツ「パトス」に由来するとされ、資本主義に基づくプロを頂点とするアメリカ野球に対する、社会主義に基礎を置くアマチュアリズムに基づいた発展を遂げる。プロの参加が認められなかった国際試合において、連戦戦勝を重ねる姿は、同じく社会主義革命を起こしたニカラガア同様、革命後のナショナルアイデンティティの核となった (Wagner : 1988)。

同じような例はドミニカにおいても見られた。ここでも野球の源流を土着のゲームである「ビティア」に求めることがあるし (戸部 : 1991), 20世紀初頭、「グリンゴ」(白人外国人) のゲームとしての野球における北米支配の象徴であった米国人選手はドミニカ人の抵抗の対象でもあった。一方、ドミニカ野球は「ワイルド・ボール」とも言われる感情を前面に押し出す独自のプレースタイルを確立、それに順応できない「グリンゴ」はたとえ、MLBのスタープレイヤーであっても解雇の憂き目に会った (Klein : 1995,115)。

クラインはまた、ドミニカに根付いた野球を文化抵抗のモデルとして位置づけている。

1914年に米海軍チーム相手にノーヒットノーランを達成した投手が後の米国による占領時にレジスタンスのシンボルに祭り上げられた事実、各チームの勝敗より自国の選手の活躍に重きを置くMLBについてのメディア報道、MLBチームよりも国内チームの帽子を買い求めたがるファンの気質などは、野球というスポーツが、「中心」=米国に対する、「周辺」=ドミニカの憤慨表明のツールとして機能していることを示している。つまり、野球が周辺の途上国に普及することは、両者が同じ土俵で勝負できる「抗争の場」を「従属者」に提供することにもなっている (Klein : 1991a,b)。

しかし、MLBという資本による系列化の進む現在においては、ドミニカのトップ選手は富を求めてMLBに包摂されてゆく。富を手にした彼らの中には、もはや故国には帰らず、米国の永住権を取得する者も多い。「脱領土化」(アパデュライ : 2004,78) した今日の世界において、「抗争の場」はアメリカ資本がしつらえたMLBのリーグ戦や、WBCに移行している。「周辺」のドミニカ人がナショナリズムを想像し、大国と渡り合えるスポーツというツールを感じるその場も、舞台を「中心」に移している。

クラインのいう、もう一つの「抵抗の場」であるファンによるアパレル製品の購買についても、近年は米国資本による侵食が進んでいる。ドミニカ人ファンがMLBのものには目もくれず買っていたドミニカのチームのレプリカ帽の後ろにはかつて、ドミニカの国旗が刺繍されて

いた。それが現在では世界各国のプロ球団のチームキャップの製造を手がける「ニューエラ社」のロゴに取って代わられている。ドミニカ人ファンの「抵抗の場」も又、米国資本の手におちてしまっている。

#### 4：MLB拡大の要因：「周辺」を求める「中心」

先に見てきたように、野球のグローバルな普及は1950年代を境にその性格を大きく変え、資本との結びつきによる拡大を加速度的に進めている。その様相をドミニカを例に概観したが、この流れは1990年代以降アジア、ヨーロッパにも広がっている。

なぜ、1950年代なのか。また1990年代における多国籍企業MLBと結びついた拡大はいかなる性格をもつのか。ここではそれについて考えてみたい。

##### 4-1：MLBによる北米プロ野球の組織化とラテンアメリカ野球の包摂

米国内のプロリーグが、MLBによって完全に包摂されてゆくのは、戦間期から1950年代にかけての時期である。大戦中の選手不足から、MLBはマイナーリーグからの持続的な選手供給ルートを求めるようになり、人種差別的な観点から別個に存在していた「ニグロリーグ」からの選手受け入れの必要性も出てくるようになった。さらに、「第三のメジャーリーグ」たろうとしたメキシカンリーグによる選手の引き抜きと、そこでの米国黒人選手の活躍は「カラーバリア」の撤廃のきっかけの一つとなった。

ロビンソンのデビュー（1947）後、MLBは発達してゆくテレビというメディアを通して<sup>17)</sup>「最高のプレー」を全米に見せながら国内のプロ野球の序列化を進めるとともに、経済的後背地であった中米カリブ地域のプロ野球をも包摂していった。かつて1950年代前半までは米球界に対抗しうる存在でもあったドミニカやメキシコのリーグはこの時期を境に自立性を薄め、MLBの「ファーム」化する。前者は先述のとおり冬季リーグ化してMLBへの選手供給地、若手北米選手の経験の場として機能するようになり、後者はMLB傘下のマイナーリーグ組織に組み込まれた。

##### 4-2：MLB拡大の必然性～「技能密度」～

ニューヨークにあったドジャーズとジャイアンツの西海岸移転（1958）をきっかけに、16球団制であったMLBは1961年から拡大策を開始、1998年までに30球団に倍増する。

ジンバリスト（2007,31-33）は、これを「技能密度」の概念を用いて、集客上の必然であると説明している。球団数の拡張はMLBというエンターテインメント産業の永続的な発展のためのマーケットの拡大の帰結であり、それは結果的にファンの注目を惹きつける役割を果たした。

「技能密度」とは一定人口におけるトッププロリーグ選手の比率を指す言葉で、つまりは一定人口における選手の総数が減るとリーグ自体のレベルは相対的に向上するが、選手個々の技能の差は小さくなり、突出した選手による「新記録」は出にくくなる。全米の人口が倍増し、その後半には黒人選手、ラテンアメリカ人選手の流入の始まった20世紀前半のMLBの状況はまさにこの「技能密度」が低下した時代であった。その打開策として球団数の増加は必然であり、現行の30球団制になった1998年には「技能密度」は1930年の水準に戻った<sup>18)</sup>。実際、1990年代には投打とも好記録が続出し、ファンやメディアの注目を集める「歴史的瞬間」は増加、結果として球団の収益増につながった。

つまりは、第二次大戦中の選手不足から起こったMLBへの黒人選手、ラテンアメリカからの選手受け入れは、リーグのレベル向上に貢献したものの、プレーのマンネリ化を生み、その対抗手段として採られた拡大策は、選手の供給という点で、さらなる中南米カリブ地域へのMLBによる支配強化につながったと言える。

#### 4-3：マイナーリーグの縮小と再拡大～米国への選手供給地としてのラテンアメリカ

一方この過程で、MLBの拡大と反比例して、それに包摂された北米のマイナーリーグは、一旦は縮小傾向に向かう。「ニグロリーグ」は、1960年に活動を休止<sup>19)</sup>。MLB傘下のマイナーリーグのリーグ、チーム数と総観客動員は、1949年の59リーグ448チーム、3978万2717人から1963年には18リーグ130チーム、974万9381人にまで落ち込んだ<sup>20)</sup>。この期間はMLBが全国化し、中米カリブ地域のプロ野球が北米の「ファーム化」の過程を歩んだ時期と一致する。つまり、MLBの全国リーグ化とテレビ中継の普及、そしてモータリゼーションの発達により、地域に根ざしたマイナーリーグの役割は低下、MLBへの人材供給という点においても、「ニグロリーグ」やラテンアメリカからの選手の流入により、やはり役割を低下させていったのである。

1950年代は他のプロスポーツも「ナショナルスポーツ化」（平井：1997，37）していった時代でもあった。この時代以降、優秀なアスリート、特に身体能力の優れた黒人選手が野球以外のスポーツに流出してゆく<sup>21)</sup>。

このような現実には選手供給地という中南米カリブ地域の重要性を増大させた。さらにFA制の導入をきっかけとしたMLB選手の年俸高騰は安価な労働力と供給地としてのドミニカの地位をますます高めた。

一方で、1960年代から始まるMLB球団数の拡張は、必然的に各球団のファーム組織の拡充を生み、1963年以降、マイナーリーグの球団数は増加に転じ、1998年に至るまでほぼ一貫して増加している。一時は低下したマイナーリーグの人気は1980年代になって復興の兆しを見せ<sup>22)</sup>、1994年には「オーガナイズド・ベースボール」に属さない「インディペンデント・リーグ」が

ベースボールにみるグローバル化—MLBによるドミニカプロ野球包摂を中心に—（石原）

発足し、現在では10リーグ74チームを数える。これらはMLBと競合することなく、全米各地に野球を根付かせる「草の根」的な役割を担っている。つまり長期的、グローバルな見地に立ってみれば、北米の野球産業は1950年代以降、拡大に向かっている。これらマイナーリーグを支える安価な労働力を供給するのが「後背地」ラテンアメリカであることは間違いない。

1994年のストライキや2001年の球団数削減問題など危機はあったものの、MLBはそのような問題を乗り越えた。1980年代後半から現在に至るまでの約20年間はMLBを頂点とする北米プロ野球が隆盛を極めた時代であり、それを支えたのが選手供給地の確保、マーケットの拡大を柱とするMLBの国際戦略である。このことを裏付けるかのように、クラインもドミニカ国内のプロカー「ブスコン」の活動が1990年代に激化したことを指摘している（Klein:2006,105）。多国籍企業化したMLBによって主導される現在進行中の野球のグローバル化の始まりは1950年代の中米・カリブ地域のプロ野球の包摂に求められ、この地域へのMLBの影響力の増大は、米国内での野球産業の再編、拡大の反映であると言える。

## 5：ベースボールのグローバル化の行方

以上、野球というスポーツの発祥と世界への拡大の歴史と現状をカリブ海・ドミニカを中心に概観してきた。

エリアス（1995）のいう「娯楽のスポーツ化」は、資本と結びついた「見世物」としてのプロスポーツの伝播という形をとって年々加速化し、野球の場合は北米に展開するMLBを頂点とする地球規模のヒエラルキーの形成となって現れている。

マグガイヤー（前掲論文,16-21）は、スポーツのグローバル化における1920～60年代を、そのコントロールをめぐる覇権を欧州と米国が争い、米国の優勢が確立した時代であるとし、スポーツのグローバル化の中、プロ選手の移動は資本と結びついた形でさらに盛んになるとする。私が本稿で明らかにしなかったのはまさにこの点であり、近年のスポーツのグローバル化は単なる文化事象の拡大と言うよりは、文化事象と結びついた資本の拡大なのである。

1995年はMLBのエポックとなった年であった。労使間交渉の決裂から起こった前年からのストライキは、野球への米国民の興味を奪い、シーズン当初、MLBは存亡の危機に立たされていたと言っても過言ではなかった。「国民的娯楽」に対するファンの醒めた目を熱いものに変えたのは、日本からやってきた野茂英雄投手と、カル・リプケン内野手による連続試合出場の新記録樹立であった。両者があいまみえた7月のオールスター戦にファンの目は釘付けになり、その風景は衛星放送電波を通じて地球の裏側の日本にまでリアルタイムで映し出されていた。野茂投手が日本人初のMLBオールスター戦先発投手として投じた第1球は、野球のグローバル化を象徴する「歴史的瞬間」であった。

この年の米国球界で起こった出来事には現在のMLBのグローバルな拡大が凝縮されていたといっても過言ではない。選手会のストライキは膨張する選手の年俵の、ベテラン選手の大記録達成とアジアのスター選手の流入は球団数の拡張に伴う選手不足の帰結である。その結果としてMLBはファンの呼び戻しに成功、その成長継続のためのさらなる拡大の道を歩むことになる。

この当時の日米のプロ野球の日米のプロ野球の一球団あたりの売り上げは、日本（約100億円）の方がMLB（約60億円=5000万ドル）より上であった。しかしその後10年の歩みは両国間のプロ野球に決定的な差を生んだ。日本のそれがほとんど変化なしであったのに対してMLBは3.6倍（1億7000万ドル）にまで増やした（鈴木：2007,ジンバリスト前掲書,3「訳者まえがき」）。この意味するところは、MLBによる包摂の波が1990年代にアジアに押し寄せてきたことに他ならない。現在の日米間のプロ野球に構築されつつある関係は、40年前の中南米カリブ地域とMLBとの間のそれに酷似している。

1950年代、MLBは国内のマイナーリーグの包摂を完成すると同時に、中南米カリブ地域のプロ野球と「中心-周辺」的な関係を築いていった。この関係はMLBが全国リーグ化する1960年代にさらに強化される。さらにMLBによる中米カリブ野球侵食は、1960～70年代の選手会とオーナーとの収入の分配をめぐる闘争の中ますます進行、1976年のFA制導入は選手年俵の高騰を招き、その結果、MLBはドミニカにおいて「アカデミー」という安価な選手獲得システムを確立した。

1990年代になると、ビジネスとしての野球は太平洋を越えてその侵食の手を広げる。このMLBのアジア戦略の帰結が、先に述べた日米間のプロ野球の収益の圧倒的な差である。巨大資本MLBはその「周辺」を拡大し、その拡大の速度は年々加速化している。

それに対して、包摂された「周辺」の状況はどうだろう。トップ選手を奪われたドミニカはレベルの低下とそれに伴う観客の減少に悩んでいる。かつて自立したリーグとして機能していた中南米カリブ海諸国・地域のプロリーグはMLBの育成組織としての機能しか果たしていない。アメリカと袂を分かった「アマチュアの雄」キューバとて、毎年のように人材が亡命という形をとって、「西側」のプロ球界に流出している。

MLBのアマチュアドラフト対象は現在、自治領プエルトリコを含む米国、カナダ出身者である。これ以外の「外国人選手」は2005年にはMLBロースターの実に29%に達し（Klein：2006,90）、傘下のマイナーリーグを含めると、初めて契約する選手の実に4割がドラフト対象外の国・地域の出身である（ジンバリスト前掲書,p156）

1980年代から90年代にかけて、野球を取り巻く国際関係は大きく変化した。社会主義キューバが経済崩壊は選手の亡命を生み、FA制は日本、韓国にも波及、また韓国では徴兵制緩和もあいまってアジアのトップ選手の移動のしやすい環境が整った。これらの事象はMLBにとって

は国外市場の拡大を意味し、その結果、ドミニカや日本など「周辺国」のトップ選手の報酬も急騰している。

これらを考えると、MLBを中心とする野球産業は今後更なる拡大が予測される。そしてその拡大は、単に労働力である選手獲得だけにとどまらないマーケティングの拡大の念頭に置いたものになってゆくことだろう。実際、MLBの進める世界戦略は、すでにこのスポーツが伝わった地域から不毛の地への普及へと変貌している。

## おわりに

本稿ではスポーツがエンターテインメント産業となり、拡大してゆく諸相をMLBのドミニカ共和国への拡大に見てきたが、これをウォーラーステインの「近代世界システム論」あるいはフランクの「従属論」的な「中心—周辺」という視点からのみ見ることには2つの点から無理があるかもしれない。ひとつは、「見世物」としての野球拡大が、果たして米国の政治・経済力の反映として地球規模において同心円状に広がっているのか、という点である。これについては、イスラエルでのプロリーグ発足やMLBの欧州やアフリカへの普及策を見ると今まさに拡大をしているとも考えられる。

もう1点は、窪田(2006,2)が指摘するように、野球の浸透に関して、その普及は中心=米国側からの視点だけでなく、それを受容した周辺=「送り出し社会」としてのドミニカ側の視点からの見直しも必要であるという点である<sup>23)</sup>。クラインもドミニカの状況を、米国資本たるMLBが植民地的搾取の形式をいまだ継続しているとしながらも、一方では野球産業のドミニカ経済に与える正の影響についても指摘している(Klein:2006,112)<sup>24)</sup>。

しかし、一見富へのツールや娯楽の提供の役割を果たしているように見える野球の拡大は、「中心—周辺」間の格差拡大を助長するシステムであるとも言える。選手の一部は富を手にするが、MLB球団のオーナーは、そのスター選手を利用してより多くの利益を得ているし、そのスターを支持するファンもまた、テレビ放送の視聴、グッズの購入によって搾取されている。

グットマンもスポーツの伝播の経済決定論、スポーツが「近代世界システム」の一部であるかのような論調には反対し、辺境の従属国がスポーツの世界においては、本国を凌駕することがあることをその反証としている(前掲書,200)。確かに、MLBにおいてドミニカ人がタイトルを獲得したり、WBCにおいて日本チームが「世界一」になった事実は、アメリカ=本国とその他の従属国という「システム」という構図を打破するものの一見見える。しかし、MLBのドミニカ人トッププレイヤーはもはや故国でプレーすることはなく、WBCが始まったとき、そのほとんどを日本プロ野球の選手で固めた代表チームからは実に4人の選手がMLBに移籍

した。おそらく今後WBCの度、日本代表メンバーからMLBへ移籍する選手は増えるであろうし、代表メンバーにおける大リーガーの割合は増えていくものと思われる。これを見ると、野球の拡大に伴う「システム」は確実に構築されている。

最後に、本稿では野球の世界的拡大を検証するに当たって1950年代をその性質の転換点としたが、1950年代の地理的に近接した中米地域のプロ野球包摂と、1990年代の地理的近縁性が意味を持たない「脱領土化」した拡大を同一視するのは無理がある。FA制度をきっかけとしてよりドミニカへの侵食の度を強めてゆく1960～70年代とともにこれらの時期をさらに分析するのは今後の課題である。

#### 注

- 1) 国際スポーツ・体育評議会の「スポーツ宣言」(1968)による定義(松井:2007,14-19)
- 2) スポーツのグローバル化研究史については、高津,尾崎編(2006),8-41に詳しい。
- 3) 例えば、古代ローマがギリシアを征服したにもかかわらず、文化的にはギリシアが優勢であったり、近代スポーツにおいてインドのボロや日本の柔道が欧米へ普及したことを挙げている。(グットマン:1997,186)
- 4) スポーツの伝播について、「中心-周辺」という構図で論じる傾向のクラインも、近著では、ドミニカ野球の発展を貧困から抜け出す手段としての野球という単純な図式で見るとを否定、歴史・経済・政治などの様々な要因が絡み合った現象であるとしている。(Klein:2006,92)
- 5) これより先、新興のアメリカンアソシエーションとナショナルリーグの間で、1883年に協定が結ばれ、翌年からは両者による「ワールドチャンピオンシリーズ」が行われている(福井:2005,12-13)。福井はこの頃からすでに、「メジャーリーグ」と「マイナーリーグ」の区別があったとするが、両者を「大都市を本拠地とするリーグ」と「中小都市を本拠地とするリーグ」というあいまいな概念でしか定義していない(同,16)。本稿ではその定義については触れないが、少なくとも20世紀半ばまでは現在のMLBを頂点する「オーガナイズド・ベースボール」のような組織だった企業連合は成立していなかったと考えられる。
- 6) MLB球団が、いわゆるマイナーリーグの球団を傘下におさめ、「ファーム」化してゆくのは1920年代、セントルイス・カージナルスのゼネラルマネジャー、ブランチ・リッキーの画策に始まるとされる。1950年代までにはほぼ全てのMLB球団がマイナーリーグ球団をその傘下におさめる。(エイブラム:2006,94-99)
- 7) このツアーは1888年11月にサンフランシスコを発ち、ニュージーランド、豪州、セイロン、エジプト、イタリア、フランス、英国を巡り各地で試合を行い、翌年4月に帰国した。
- 8) 1921(大正10)年、日本運動協会が設立され興行的にもまずまずの成功を収めるが、宝塚運動協会と名を改めた後、1929(昭和4)年に解散している。現在に続くプロ野球は1934年に始まった。
- 9) 2006*World Baseball Classic Official Program*,52
- 10) Rondon, Tito "A short history of Nicaraguan Baseball" Nica News12, March 1998 ([www.nicanews.com.ni/n12/bball.html](http://www.nicanews.com.ni/n12/bball.html))
- 11) 「ニグロリーグ」とは、19世紀末から1960年まで存在した有色人選手による複数のプロリーグの総称



である。

- 12) この時期、米国のマイナーリーグだけでなく、米国のリーグに参加する球団の多かったカナダのプロ野球も衰退し、MLBの傘下に属さないものは淘汰されていった。(Prentice&Clifton:1999)
- 13) メキシカンリーグによるオーガナイズドベースボールの選手引き抜きについては、McKelvey (2006) に詳しい。
- 14) クラインは、ドミニカにおいて教育と就業の関連性が薄いことも指摘している。(Klein:2006,111)
- 15) これらの問題に際して、ドミニカ政府は大統領令によって、スカウトの登録義務・MLB球団の契約の許可制・アカデミーへの英語クラス設置義務を定めた (Klein:1991b,42-45)。
- 16) 日本球界もMLBに倣い、1980年代後半から米国人選手に比べ年俸の安いラテン系選手の獲得を積極的に行っている。1990年には広島カープが「アカデミー」を設立した。これについては、戸部 (1991) に詳しい。
- 17) 1947年にピッツバーグ・パイレーツ以外のMLBの全球団がテレビ中継の契約を結んでいる。(福井:2006,58)
- 18) 1990年には38万5千人に1人であった大リーガーの比率が1998年には36万人に1人となった。(ジンバリスト:2007)
- 19) この年に、「ニグロ・アメリカンリーグ」が活動を休止した。
- 20) *Total Sports* 6th ed 1999,526
- 21) 1950年代以降、黒人選手がアメリカンフットボールやバスケットボールに流れていく事実についてはセージ (1997) が論証している。「米国スポーツの現場から2:減り続ける黒人大リーガー」(毎日新聞2006.9.13朝刊)では、近年のアメリカ社会の「格差」拡大に伴って、貧困層の多い黒人の子弟が道具に金のかかる野球を避け、トップリーグでのプレーが比較的容易なNBAやNFLを目指す現実について述べられている。
- 22) 1987年には1試合あたりの観客動員は1950年代以前の水準に戻った。  
[www.minorleaguebaseball.com/index.jsp](http://www.minorleaguebaseball.com/index.jsp)
- 23) 窪田は、在米ドミニカ人がトルヒーヨ独裁政権崩壊 (1965) 後から安定して増加傾向をたどり (2006,3)、彼らを中心とする海外からの邦貨にして2100億円以上の送金がドミニカ経済に少なからぬ影響を与えていることを指摘する (同,39)
- 24) ドミニカ人大リーガーが2003年に米国で稼いだ金額は2億1千万ドル、マイナーリーガーでも数百万ドルになり、この約2割が送金や投資を通じてドミニカへ流入、その他アカデミーなどドミニカ内でのMLBによる雇用創出を含めると、野球がドミニカ経済に年間7600万ドルの貢献をしているとクラインは見積もっている。(Klein:2006,119)

#### 参考文献

- アバデュライ,アルジュン, 門田健一訳 (2004) 『さまよえる近代:グローバル化の文化研究』平凡社  
ウォーラステイン,イマニュエル, 川北稔訳 (1993) 『近代世界システム』名古屋大学出版会  
内田隆三 (2007) 『ベースボールの夢:アメリカ人は何を始めたのか』岩波新書  
エイブラム,ロジャー.I, 大坪正則ら訳 (2006) 『実録メジャーリーグの法律とビジネス』大修館書店  
エリアス,ノルベルト, ダニング,エリック, 大平章訳 (1995) 『スポーツと文明化:興奮の探求』法政大学出版局  
大島祐史 (2006) 『韓国野球の源流:玄海灘のフィールド・オブ・ドリームス』新幹社

- 金光千尋 (1999) 「日本のプロ野球：その近くて遙かな未来」(『スポーツ社会学研究』7,1-6)
- グットマン,アレン, 谷川稔ら訳 (1997) 『スポーツと帝国～近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂
- 窪田暁 (2006) 「越境する野球移民：ドミニカ共和国におけるトランスナショナリズムの一諸相」(『ぼぶるす』5,1-48)
- ジンバリスト,アンドリュー, 鈴木友也訳 (2007) 『60億円を投資できるMLBのからくり』ベースボールマガジン社
- セージ,ジョージ・H, 深澤宏訳 (1997) 『アメリカスポーツと社会～批判的洞察』不味堂書店
- 高津勝, 尾崎正峰編 (2006) 『越境するスポーツ』創文企画
- デッカー,ヴォルフガング, 津山拓也訳 (1995) 『古代エジプトの遊びとスポーツ』法政大学出版局
- 戸部良也 (1991) 「ドミニカ野球事情：広島カープが開設した「野球学校」の意外な波紋」(『潮』6月号,284-290)
- ハリス,ジャネット・C, 菊幸一訳 (1998) 「アメリカから：アメリカン・スポーツに熱狂するアメリカ人～競技スポーツという渦の中にある揺るぎなきもの」(日本スポーツ社会学会編『変容する現代社会とスポーツ』世界思想社, 16-31)
- パイ,ゲラリン, ベタビーノ,ポーラ, 草深直臣ら訳 (1999) 『キューバのスポーツ』創文企画
- 平井肇 (1997) 「スポーツファンのアイデンティティ：ローカルヒーロー, ナショナルスターからグローバルアイコンへ」(杉本厚夫編『スポーツファンの社会学』世界思想社, 27-50)
- 福井幸男 (2005) 「アメリカ大リーグにおけるイノベーションの系譜 (上)：勃興から発酵の時代」(『商學論究』53-3,1-28)
- (2006) 「アメリカ大リーグにおけるイノベーションの系譜 (中)：制度化の時代」(『商學論究』54-1,39-58)
- マグガイヤー,ジョゼフ, 東方美奈子, 松村和則訳 (1999) 「スポーツ化とグローバル化：プロセス社会学のパスpekティブ」(『スポーツ社会学研究』7,13-22)
- 松井良明 (2007) 『ボクシングはなぜ合法化されたのか：英国スポーツの近代史』平凡社
- Guttman,A (1991) . “Sport Diffusion : A Response to Maguire and the Americanization Commentaries”, *Sociology of Sport Journal* 8,185-190
- Kelly,John,D (2006) . “Baseball and Decolonization: The Caribbean,1945-1975”, *The International Journal of the History of Sport* 23-5
- Kidd,B (1981) . “Dependency and the Canadian State”, in Hard,M&Brown,W.C (eds.) *Sport in the sociocultural process*,707-721
- Klein,Alan,M (1989) . “Baseball as underdevelopment: The Political Economy of Sport in the Dominican Republic”, *Sociology of Sport Journal* 6,95-112
- (1991,a) . “Sport and Culture as Contested Terrain: Americanization in the Caribbean” , *Sociology of Sport Journal* 8,79-86
- (1991,b) . *SUGARBALL : The American Game,the Dominican Dream*, Yale University Press
- (1995) . “Culture, Politics, and Baseball in the Dominican Republic” *Latin American Perspectives* ,111-130
- (2006) . *Growing the Game : The Globalization of Major League Baseball*, Yale University Press
- Mckay,J&Miller,T (1991) . “Old Boy to Men and Women of the Corporation: The Americanization and

- Commodification of Australian Sport”, *Sociology of Sport Journal* 8,86-94
- McKelvey,G.Richard (2006) *Mexican raiders in the major leagues:the Pasquel brothers vs.organized baseball,1946*, Mcfarland
- Prentice,Bruce& Clifton,Merritt (1999) . “Baseball in Canada” in Thorm,John, Palmer,Pate (eds.) *Total Baseball* 6<sup>th</sup>ed,Total Sports,544-548
- Ruck,Rob (1999). “Baseball in the Caribbean” ,in Thorm,John., Palmer,Pate (eds.).*Total Baseball* 6<sup>th</sup> ed,Total Sports,536-541
- Wagner,Eric.A (1988) . “Sport in Revolutionary Societies : Cuba and Nicaragua” in Arbena, Joseph.L (eds.) *Sport and Society in Latin America : Diffusion, Dependency, and the Rise of Mass Culture*, Greenwood Press,113-136
- (1990). “Sport in Asia and Africa:Americanization or Mundialization?” *Sociology of Sport Journal* 7,399-402

(石原豊一, 立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程)

## Globalization Watching from Baseball

The diffusion of sports is one phenomenon of the globalization. English-born sports extended in 19th century shows that the center of industrialization was England, thus it seems inevitable that baseball expanded to the world after World War II because the center moved to the United States.

The global diffusion of baseball had changed its character in the 1950's, and is expanding through the relation with capital with accelerating speed. This thesis takes a general view of the aspect on the case of the Dominican Republic.

There might be impossibility in seeing the expansion of influence power of MLB to the Dominican Republic only from the aspect of Wallerstein's “Modern world system theory” or Frank's “Dependency theory”. The facts that Dominican players get the title in MLB and Japanese National team becomes champion on WBC tournament are seen as evidence to break the “System”. But Dominican Major Leaguers don't play in their homeland any longer, and lots of Japanese players who played for WBC moved to MLB. Thinking about these phenomenon, we can see the ‘Core- Periphery’ model in baseball diffusion.

(ISHIHARA, Toyokazu, Doctorial Program in International Relations, Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)

